

古く考少集

十四

2130

古今著聞集卷第十八

飲食 第十八

食者人之本也八政酒以食為首物中釀酒者起自素盞鳴尊凡酬酢之興何物若之三友之其一放遊之紹介也

平の穿白ま目のめきよ依私志後よりさるに御車内肉は酒饌とさうさう秋、宇陀大御中堂入道取寄ぐまひのせまりて酒酌の事大まきりん、細きごとくされくがり御堂とのいおそれるそと、まゆりと後ハ也ぞありて依存せし秘法ハさると

古今卷十八

この目のさやうまよりて、まき神志とわらうとぞ、後小作らまきる中宮白ハくさひ、此のまきつこのあまくとた極楽世界は穢家わくまされ又、性まよとべくまきとぞ作らまきるかき取つての時と志ひく神より後を家車れうら此は冠おらまきり御ららうくまき人れまきりまきれば、たごられまひくあまきとりらうくびんをまきり後、たれがゆきのぶとくめ免とくかんに折るるとは、酒客候りくゆきまらりてくまきりたる

寛弘三年二月廿日、白鳥之藤より一巻、此は、

あつとねづさあくりよをせ

わやーぎなるげとおとの祥祐を傷心小丸と
にありありをれん

まはる川口果のうやをせをせう

ひやあつとねづさあくりよをせ

え長の前大傷心小丸をせう
きりに後急法中あつとねづさあくりよ
つりたてよみきふ

わや先とんわりなりてとせう

らまはひくねるうらにうや

古今卷十八

〇三

込一傷心

こがりやよあわあてねさねが

らまはひくあのをそつとねづ

知是傷心中能あのと此對たい小ましくあつ納を
字補 小筆とねくりを法をる耐辱たうの刻より申り

いへるまで他すねくりをりその耐盡たい能ぜんとあつを

らまはひくよまを先りききり保中納をなま

いへる耐とんがりよまを先りの保祐ほごとあつを

長納をの能とよまを道良ちやうらお耐たみとあつを

長納をの能とよまを道良ちやうらお耐たみとあつを

とする所乃長御人まのまじりのまじりと呼て純子じゆんこ地
 人小ゆつとんとはまねくらまよひかり備実びじつ並なら有あり泉いづみふま
 も耐納玄たうなうげんのいそとらいそ山師やまのし通ととと響ひび響ひびををるる目
 二道長にみちぢやうあんであ耐たああとと他た人ひとののゆゆづづるるぶぶままちち良らららつ
 ととももあありりととててもも先まととれれどど耐たああううららああひひりりて
 ののままれれををりりんんととんんくくああををれれををりりががああるる人ひとをを
 ちちななああの子こぢぢりりををぞぞののひひるるるる良らいいかかううとといいも
 ののゆゆりり糸いとづづののたたのの小こ油あぶら川がわのの府ふ六む糸いとけけゆゆふ
 りりううづづれれををままりりんんででななづづつつのの母はは事ことををせせししままえ
 直ち奴ぬののままををるる耐たももああ下したのの前まへののややううららつつ度たぎもも他

古今卷十八

人れ親おや子こののあありりううづづりりををりりをを泉いづみふふああぞぞ備びせせるる
 在あ京きやうををままりり備びははけけりりままとと或ある人ひととと比ひしてしてぢぢりりととら
 ちちるるににささららとといいふふかかららいいちちととりりををああひひ備び
 ともともおおねねううららつつひひささるるはは二におおののままををあありりええ
 一いつつりりももああ

まのこれえうてみまよう

隆たか等らう法ほう衣いつつききあ

目めののままりり直ち奴ぬををままりりににててままああららままれれ
 ことことゆゆりりああららううももああららんんととああららうう

あふあふしとさねえそねりきれ

前もきけるわをさうひつけゆるる

こゝのあれとやうにまはるらん

或やま更敦史あつし下れりともありたる信の

あまみそといふ物としてさうりきりたつたが

と毎りぞくとひたれが倍りくねん

さのあいてらりらりらりらりらりらり

敦史下

みつれらうとをさねえとまうらん

法性かぜうしの庵元あふり三ふらまの院ちうりやんのそねひきり

古今卷十八

〇又

ゆつと物次ものつぎのしそくをさりきりたうとあり

せまひくまのりきりたのむにわていふさり

らさうせまひきりきれがゆとのさねのうららり

とらりらりきりた打らりせねりきりた

とくねん信きれ

と羽は下したゆらゆらのとれ在良ありよし下した信しん後ごりて

つとまのりきりたゆらゆらゆらゆらゆらゆら

後のち下したをを滴ためてゆららるや

保延三年九月廿三日宝全剛造 仁和寺 仙洞せんどう小この章しやうをそ

十じゅうびんの競けいふとゆららるきりたゆらゆらゆら

亦向ふあそふ事歟以下とバ内規トミテ決貴ト奉
 ともとに如しれあ亦不有共出程ありまじ知漸地
 ハ慶中^{いんちゆう}よりみり登内^{たてうち}を長信^{ながのぶ}又納^{のう}云備^び事^{こと}おは
 拍子^{うし}ひのり初^{はつめ}トミテや初^{はつめ}ト申^{まを}ゆ終^{すまひ}初^{はつめ}ひりら
 ね東^{あづま}の初^{はつめ}すまぬ罷^が置^おね官^{くわん}新^{あらた}大^{おほ}納^{のう}云華^{はな}在^あるの
 うと初^{はつめ}冬^{ふゆ}の初^{はつめ}に拍子^{うし}な事^{こと}の^{こと}双^{ふた}調^{てう}平^{へい}調^{てう}つひの
 由^{よし}程^{ほど}よんはむ平^{へい}調^{てう}程^{ほど}及^{およ}びまきり重^{かさ}敷^しの候^う
 今^{いま}後^{のち}非^ず示^し調^{てう}程^{ほど}を^をまきり人^{ひと}とあつこのり白^{しろ}
 拍^う程^{ほど}いひくあよ上^{かみ}と下^{した}下^{した}落^おりり礼^{れい}舞^{まひ}抄^{しやう}録^{りく}
 ね長^{なが}命^{のみこと}とも舞^まひひくるあ免^{めん}一^{いつ}とくおく付^つひ
 一^{いつ}とあやま後^{のち}まゝ程^{ほど}及^{およ}びまきり又^{また}いひくつひの舞^ま
 わりまきり又^{また}白^{しろ}拍^う程^{ほど}いひく上^{かみ}と下^{した}下^{した}落^おりりぞ舞^ま
 きりあ^あ下^{した}舞^ま多^{おほ}ひく逆^{さか}させ給^{たま}たれど^{こと}之^{この}舞^まと
 ん舞^ままきりそのら初^{はつめ}の倉^{くら}わり舞^まを舞^まり舞^ま
 子^こ秋^{あき}とぞ付^つくる梅^{うめ}宗^{むね}大^{おほ}納^{のう}云^い序^{ぎよ}と^とまきりまきり
 そのら初^{はつめ}舞^ま内^{うち}りお初^{はつめ}と^と還^{かへ}歩^あみまきり
 同^{どう}天^{てん}年^{ねん}十^{じゅう}月^{げつ}十二^{じふに}日^{にち}白^{しろ}拍^う程^{ほど}初^{はつめ}の付^つ出^であま
 重^{かさ}敷^しまきり初^{はつめ}初^{はつめ}は右^{みぎ}左^{ひだり}のくまて付^つくる小包^{こふ}
 下^{した}ま^まと^とより一^{いつ}と^とまを^をれども舞^ま一^{いつ}と^とまの初^{はつめ}あ
 る人^{ひと}舞^まと^とは初^{はつめ}のま^ま一^{いつ}と^とまを^をれども舞^ま初^{はつめ}の初^{はつめ}

長右衛門よて作りきりて其氣味は別はしそや養
とくきありさればまことまことせほひくすく欠さ給
ありしりしされば赤成つらまうりきり群臣與り
へく目録をありきりてぞ

伊の能者長も羽衣へあはせありきりふさげはえ
とくありきりてはあよさなりのみきりて右の
まふとませくくおはつてきりてまふ酒師
節少て胡飲酒とてせしりすしりきりて右
斎相子とありまふとありてひきりては
はくしてゆりれりきりて是れとてきりて

古今卷十八

仲胤修那は揚子江八海ふとくきりてされど
追かされく流の由氣又阿くくおとりあり
きりて流の年れきり人のりきりてきりては
おたりきりてはえきりてあり

ふびつるれくちかてくきりて
ちりのおれあはひては
親知傍於九条の古殿大匠のり中へひきりて
らりてきりてあり

ふの殿に年の子ありしむじり
ひきりてはえきりてあり



古今卷十八

〇又七



き酒をのく慮使し後より其まゝの興と申さるる
ひとへりぞぬさる酒さうひの人ふくせし府の
車の中へひくへまのくせらきてりさるたさる
小のぐれやまきされもわがからふやまのまじりのり
て束へさう法ひより一乗二位の八人徳保有る
のくまてゆくる壺切まうまは後く色けり
壺切まさんありてゆきこめめしゆまされく後り
作して程よりありな府ゆきまうた志め法さる
程酒備はるうとがね知りた合申うまはまじさふ
て足せんとのまひより極とにゆうまぜり

めさうりきうんも自とまふまのいさう那也
足法ひさる付る牛をいりせんせきさり幕下
大程まひまじりさきさるめり人の
ま合わりがたはへと法自わた内を感法は法
中もさる中よさやひさりけり事とまは法は
とととまされされははせりまのわかれとくわが
うあくとひふな府をいひさ入所とらめんかくの
よりまされたりされでわて後法をさり又壺切
あり初敵ハ内室をわけを法ひ二敵ハおとを
わけくゆをまのくせきさり西月が物あは

牛あどまのうせしれたるぞ

曉けつ乃の法ほう下げ人の絆はなへすなりぬりぬるに凡ふつとぬか

しりききぬぐまろくかしてあつてしりきぬだまの

中ちゆう後ごれやをらと人ひとやありふん

あつてぬらひひさこなりきり

くくわひまりて凡ふつとらいつるおよそ或ある人ひと兼かね法ほうの

と船ふね空くうなりやと云い法ほう向むかてわしりきぬはゆのく

兼かね道みち法ほう肺はいのみゆる

わらひとぬらふまわりとぬらふ

いさあうりふうと色のあさど

陰かげ弁べん入いれた寧ねいお中ちゆうおおすすとと竹たけ々々耐たえ梳く井い交あままあり

きりにきぬぬるぬりり懸か念ねんよよぬぬくく寧ねいお中ちゆうおお七しち八はち袖そで

まのまいいとと竹たけ々々ぬぬららららききせせりりききりり或ある

上かみ々々神かみ八はち相さう七しちとととと兼かねととつつひひ八はちととりり

里さとなるなり須す寧ねいお中ちゆうおお足あしててわわくく切きつつるる袖そでれれととひひ

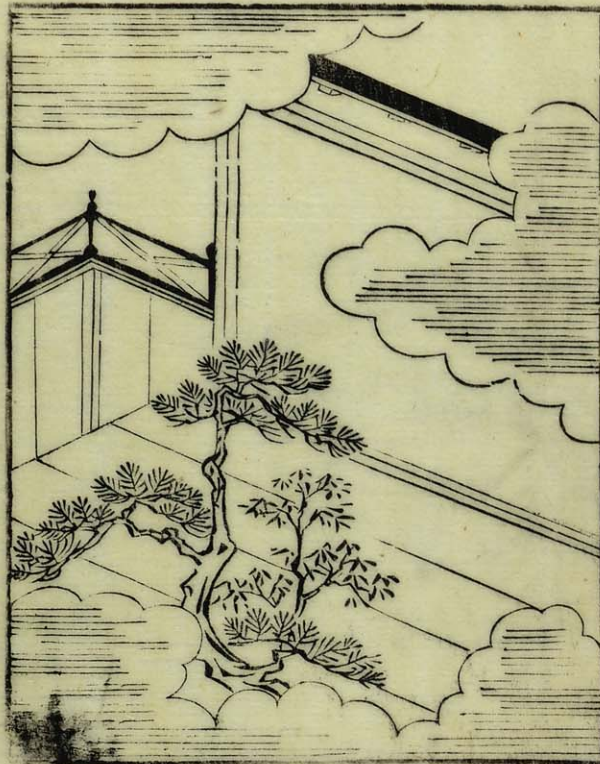
ききりりももいいととぬぬららららあありりととああももぬぬららんんどどて

何なにもも作つくりりししととりりととむむりりととええぬぬららぬぬままのの

ききりりもも竹たけ々々れれををききばばききりりぬぬららぬぬままのの

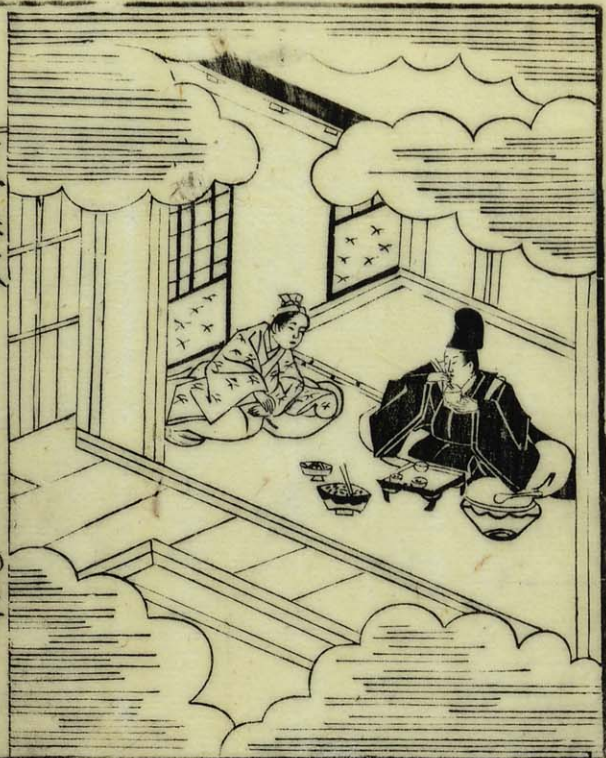
かかひひ法ほう肺はいののととあありりととつつととぬぬららぬぬままのの

とと袖そでららりりととままののせせりりとと作つくりりししととぬぬららぬぬままのの



古今卷十八

〇ヌ十



包下カとねとさうきりま川無きそそく入るるん
と赤切くまのせうをれと文少下入無きり
そんのけ集まきんごうのり考が中へきりその
けの念見あせしうらざりするそと神をばら切よ
ぞ切つ所とそと神派さるそとい蓋故出抄の附
れ看おし蓋と人かそ交吞ゆそと侍とやそのそ
やうさう成りて一考蓋入て一考をりて一考こ
穿お中お心この定まされりきりこもそみ所
厚徳法は附新強人深那附多配とまける極
龍以下とさうひひまて次書れ事九おと般ひり

三缺の後一福判安者京の厚すといひさるる今取
新強人少強とれていゆとまそと又沈解よ及べ
ばうよまやあくそ強ひ物よそよぶとといふ
那附これを知つらうまそとまそといひ作派のひま川
やといふ康光のそと益高射考附とる出され
て路器とらと那とまそと細派とすそとまそ
りそとまそとみゆりたね書まそとまそとねづと
いひさり考附とみゆりたねとまそとまそとみ
よのねとねとねとまそとまそとのゆとまそとねのそ
れり中の格ふお空須のけと西漢とまそとねとまそ

あまのまゝなりをりまよひてと象せやのちりくあ
時これいふてりも再さよせぬわいのどくわだ
作もまざるに新入人の出所のくふ事りて孝時
とておぬるにわらびちうさうげどくりつさそ
ゆへにゆへに康光がいとむじり事伴のたけんか
志すすの願まりくと録がよまてうひくるとめ
知しそのあれたらぞのうたふよりて之をま
まうくけらつこの事やゆつとてまやうり
内侍をたけうわひやされとていふ言と又孝時
びん人の品物よまてややくあつくうぶとていふれ

冬阿りのぬべーとて侍もがう孝時がびんせふ
りへまててををりまてうりつての狐あせ
娘ひたりも今うがとてゆつていふていふ
まのりとてとあがくすまへとていふを娘され
びまに新入人よあひまてはなわてのひまあま
とるのく知おどり極福とてあま極福一高き
知娘がうふよまてはな知娘のいさよゆりて香坊
とてこれゆまめんがくおくとていふ極福して
てんといふと之福とて大膳完花細がまてはな
知娘がいふと極福とてあまのあまの極福あま

いみじきれりあはれに細産をてりてすんべと
て吾よりぞり花細のみどくもなかりきるま三
篇のうらつきてゆきる當座のめんがくゆー
りぞりば後極福つひれ信よにひれ琵琶とぬと
とせれゆーとのふ新衆人とぬとら産城を
てある耐そのつわぐよゆやえとおねどくわの
とれつてひひかりとあつらあ物とてえまされが
産素比巴とあらふ一篇のえ産祥よりも後胡録
あり孝耐新衆の酒色の匂と極と極福かぐは
非織知産物とをとおめく無小のりて教献おなて

半こそふせりる能を年とてえてゆくは那耐おこ
ーおとねひつりき産ひとどくりぞりばのりひとえ
て今ひまあえん
七月七日びごあんこの席中よへ産とてえん
とあへくよんる信能せま

いふねまごんせいのおねくねじごあんの
一房りーたなぬあらん

まねに養定法やがりやん能とつりてけん
くのくこれかりりのわいば殺着う産てとてまじり
つあ美とつりやん産るひい

あめつらみのなれわらなひも
さうこの紙よみぐくなりぬれ
同法中が家のまの紙と弟の紙とまたうまれば
人いれぬあ紙ぞい井ふくしめる
あのもんくまの紙とあのもんせ
ぬれころりらとよめりさる

ちまよりとんふそつこのありり
びんぐうもあるわやちりんと
ま移りれ積紙よみゆりさる

おれどけあこ移りれたれとあつう

古今卷十八

〇十に

うめばさゆ海物あぞまけあ

な條の前肉た長あまぶの二位きておあれさ
まきると二月の事ぬりまると言ふあまづ積紙と
て二あよすえらきとりのいとくび書たゆりて
後て二条中物を言されくとつうりらんあ
はら書このよそゆくとやされだをれとら紙のあこ
かりておされなまらつうりとりまねぐあぬ
のちよ

あまのうまのまらなまおのり

あかられ書つひまのこの申書

よむれなぞりそへ二宗志よりふ具よみたり
同二宗志命の正方の比すすれとどよりとあり
するより一はく坊城なれ他の蓮のては下道
てとりの侍一とすよ

老の身よ神うたへらものむるま

君のらとをのちらやむせん

醍醐大傍心実賢ちほらとら成中とえくひさるり
らりあて存福がり人あてとらとむせり
くく神がりさるにまうよは徳帝とのお格と老
のまきるが傍心の神がりてうむづくすととれり

古今卷十八

ばとららえとぎとまぞとんぬくそりりり
てよお持てるとら成とくくぞり傍心成
高座あてお持てるつるとらびておれなれは
ととららへもくくとらまのておねとあつる
傍心は具の事なりとそとあんりわたりて
ひらひさるりそと
石泉法下せきせん秘性ひせうくく海でこれ別ありとれり
すともおほくまうけと海とある人のりやと
らんとすよあり

あめさへいらく海のかいそととと海ぞ

それがそまゝにむくであらう

聖徳房中子夫くたり酒あめてゆきまゝは六
のいふよりくつらのきめのさうりくつらまゝは六
度よまきまゝ人のいひたる

く、あられやのいふあつくとあつと

房さうらふのくつら

あまのつてくれはつりそあせん

めぐぬくくそつぎまきゆれ

別あ入道おまゝ川よまきみゆまゝ山のとび

とありくおぬの好つつらせりまゝよ

おひやち二木の書れ下まゝい

ありてまゝいんま〇ぞあつと

三系中物を基に 八人おまゝなれる大合はそぞ

まきまゝなつてまゝいおびつてく肥あつと

基まゝにぬねまきまゝくせくねたり六月の法

医師とまびくくまれらる一はといひる 厚紙

まづまゝにゆいぬねまきまゝいいたまび肥満の

医師さうらふむづまゝまゝいいたまび肥満の

ゆいあそぞゆいん良薬もあつとく先物あ

の厚紙と目ごうらうらひにまゝあつとまゝい

わさハわ川らとゆつてお飯つけと時きまのりえ
内身はうらなまきまきつうーとてうーひんが實
とさかうふてそせめとて醫師ハうりふざうわ
時お飯くあうんせんとその醫師とふひり
されど事てがりま川あつ子のたらは口んあ
すざうりならに飯とうげうたとりておあが
あせうてわをさやひ一人おのぎよおおにま
うり又一人飯のまといお物をあつて中あうり
とてそれもまろよのうらよもてあうりぢ
きとわかおびてうやまればと餐意せんすの辨

古今卷十八

やうじと醫師ハひさるほどにみおをさやひ一人
つきまたお非のうらと物とましく中物ちのまは
び二の川とおよお飯と今くまうはさ船がうおせ
しゆりあれどお飯と二うれうりにせへた今
とて又二川流一口ふくひくうりうくすらと七八
あかりぬまてくらなりつらお飯と飯のすしと
うぬまきり醫師これとんくお飯もあうり
まりゆらんよとてうりひひくやがておげおよ
おとまや
わの人のりやよとてはさやひたうり河ひ

とらんといふて先だる所(年)あつて海よりひ
一人あつりせれどいづしつに鷹とらせどとお
りひく番(ぬ)めされはよいの死より後(と)りて死
侍(は)いのまねで老る侍(の)鷹とらねは(と)らせ
とそく(い)やとそ(あ)が(を)座とま(く)ぬ(か)れ
くぞ(い)ふ(ま)ひ

あらえり鷹とらんといふとあつが

老る物といふとあつとそ

古今著因集卷之十八終

古今卷十八

〇十八